# 乳幼児の人格形成（二）

中沢たえ子

## 二、自我と攻撃性

だれでもが戦争を恐れ、嫌っていながら、地球上の何処かで人間同志の憎しみ、殺戮、戦争が繰り返されている。これをわれわれ現代人は、「人間には攻撃本能があるからしかたがない」とあきらめ顔で言う。では実際に人間の一人であるわたくし自身の中に、またわたくしたちが育て、慈しんでいる子どもたちの中にも攻撃本能があるのだろうか。もしあるとしたら、われわれは他人を攻撃しなくてはならない宿命を負っているのだろうか。しかしわれわれは他人を攻撃したりしてはいけないと教えられている。としたらわれわれの攻撃本能はどうして了っているのだろう。

別の話だが、十年程前、私の隣家に三歳位の男の子がいた。非常に元気な子で、大人をみると、ニコニコと笑いながら近寄って来て、ピシャリとひっぱたくのである。小さな掌で叩かれると結構痛い。見ていると彼は自分と同年配か年下の子どものことは叩かない。むしろ割合仲よく元気に三輪車を乗り廻し、一緒に三輪車をアパートの壁にガチャンとぶつけては大喜びである。自分より二、三歳年上の子どもから大人に対してはだれ彼れとなく近寄って、ピシャリとやって逃げて行く。それを見て、母親が「いけませんよ！」と注意すると、今度は母親を叩きに行き、押えられると噛みついている。数年後、この男の子に会ったところ、もう他人を叩くことなどせず、元気で活発な男の子に育っていた。いったい、あの二歳の頃、だれかれとなく叩きまくり、母親に噛みついたのは何故だったのだろうか。またあの叩かねばいられなかった攻撃性はその後どうなったのだろうか。

すでに一九二〇年頃、フロイドは人間の生物的本能には性衝動と、攻撃衝動の二種があること、後者の攻撃衝動は、幼児が成長に伴い、次第に育ち、成熟する自我の機能の中に組み込まれ、何

時のまにか自我機能として活躍をする……という説を述べている。本能としての攻撃性が、生々しい攻撃性のままではなくて、すなわち戦争や、叩いたりすることではなくて、個人が現実接触に使う機能である自我の一部分として、即ち現実に受け入れられる機能として、成長して行く過程とは、どういうものなのであろうか。

はじめに例として挙げたように、二歳の男の子は、親しみとまた、挑発的な気持ちをこめて大人たちを叩き、母親から制止されると、自分の感情と行動のコントロールがきかないで一層むきになって母親を噛る。このように、幼児の日々の行動には、心理的には必ずしも相手を憎んだり、怒ったりするわけではなくても、攻撃的行動と思われるものが沢山認められる。投げたり、つかんだり、破ったり、毀したり、噛みついたり、汚したり……。また、自分の要求を阻止されると、つまりフラストレーションに直面すると、容易に脚をバタバタさせたり、体を床に投げ出したりして癇癪を起こして泣きわめく。アンナ・フロイドやビアタ・ランクなど、乳幼児の精神分析学の大家たちは、〃自我発達が未成熟な乳幼児においては、とくに目的のない漠然とした攻撃的行動が多いのは当然である〃とのべている。

さて、このような幼児を育てる母親たちは、日々「あぶないですよ」「投げては駄目よ」「破らないのよ」「静かにしなさい」「お利口さんにね」云々と朝から晩まで言い暮しているというのが実状ではなかろうか。母親たちは、わが子が危険なことをしないように注意するとともに、粗暴でない良い子に育つことを願って、幼児を抑制し、コントロールするのである。幼い、未分化な攻撃的行動を阻止するためには、母親のコントロールがぜひ必要である。しかし、コントロールだけでは効果は無い。同時に必要なことは、母親との良い関係である。良い関係とは、前回述べたように、健康な自我を育てるために必要な、愛情を基礎とした母子の共生的関係を言う。共生的、信頼的関係を基礎として、幼児は母親が承知しないような攻撃的行動はやめようとすることができる。やめなければ大好きなママの愛情を失うし、やめれば大好きなママに賞められ、愛されるから……である。もしこの時代に、一対一の共生的母子関係が充分成立していなかったりすると、幼児は攻撃的本能をやめる根拠を何処にも持たず、なかなか乱暴をやめないどころか一そう乱暴を増すこともある。また、たとえ母子の共生的関係が一応確立していても、母親のコントロールが厳し過ぎて、口うるさい、叱責などが続くとやはり乱暴は増して来る。叱っても叱ってもその場限りで少しも効果がない、と母親は嘆くのだが、子どもの方は愛情を保証されるどころか、怖れと、

反抗心が先立って、己れの攻撃的本能を抑えることができない。さらに行動的攻撃が心理的攻撃に沈んで、相手に対する怒り、憎しみ、と同時に罪悪感が芽生え始める。罪悪感を抱きはじめた子どもは、他に対する攻撃のみではなくて、自分に対する攻撃も始まり、いわゆる他罰、自罰の両面を持った性格 sadomasochistic personality が次第に形成される。こんな傾向をもつ子どもの場合、その母親も同じような性格傾向を持ち、二人の間でお互いの攻撃性がからみ合っていることを第三者に感じさせる。反対に母親が、子どもをコントロールすることをしないか、またはできないために乱暴や、落ち着かないなどの問題が出ることもある。

ところで、攻撃性はコントロールされたからといって決して消失してしまうわけではない。普通そのエネルギーは健康に育つ場合には幼児の生活、遊びの中で探求心、知識欲、征服欲、完成欲、また交友関係の中で、自己の正統性を守り、主張する力、積極性、競争心、などに発展する。これらのものがすなわち自我機能であり、自我の防御機能と称えられているものの一部分である。

**○一歳十か月の女児の例**

長い髪をしてませた顔つきの、言葉の発育も良い女の子であるが、二か月位前から、自分の髪を抜いてそれを指先で丸めて、それで口唇のあたりをなでる癖が出て来たという。叱ってもその癖は止まらないどころか最近は側頭部の毛が薄く目立って来たため、母親は驚いて相談に訪れた。家庭は父母と四か月になる弟が居る。母親の話では、この子は母親に反抗的で、頑固で、叱っても叱っても悪いことをする。母親よりも父親の方が好きで、父親が夜帰宅するとベタベタに甘えるが、母親には甘えないという。赤ん坊が居るために外へ遊びにつれ出すことがあまりなく、家の中でテレビを見るかいたずらをして母親に叱られるかして一日が過ぎてしまっているらしい。弟が生まれるまでは母親に負われて母親の長い髪をよくなでていたという。それが弟出生後は、母親はおぶうことをやめてしまい、また、もう少しお姉さんになってもらいたいと思い、ついカッとなってひどく叩いたり怒ってしまうことが多いという。そうすると、彼女は部屋の隅へ行って、寝ころびながら自分の髪を触っているうちに抜き出したという。この母子とは三回面接して髪を抜く癖を完全に止めることができた。まず子どもには長い髪の人形を与えて、人形の髪は抜いても良いから、自分の髪は大切だから抜かないようにと両親から教えさせた。同時に母親に対しては、何故彼女が痛い思いまでしても自分の髪を抜かないではいられなくなったかをよく説明した。すなわちまだ母親の愛情の支えが必要な幼児が、急にそれを失うと

共に母親の攻撃性を受けて、自分自身の攻撃性を外に向けられなくなってしまったのである。まして外で元気に遊ぶ機会も充分に与えられず、必然的に自分に攻撃性を向ける以外に途がなかったのである。その際、以前、自分が愛した髪にそれを向けたわけである。このようなことを母親によく説明したところ、母親も、自分のイライラとした気持ちのはけ口がすべて彼女であったことを認め、必要以上に叱ることを止めた。当然髪を抜く問題は一か月位で消失し、また人形の髪も二か月位後には抜かなくなったという。

スピッツ Spitz は施設症の研究で知られているが、彼は二歳頃迄の幼児の問題的行動として、髪を抜く hair pulling 頭を壁やベットの柵にぶつける head banging自分で頭を叩く head knocking などを挙げ、これらは攻撃性がもっぱら自分の体に向けられたもので、愛情の対象を持たず、クリブの中に放置される時間が多い施設の幼児に多く認められることをのべている。

**○四歳五か月のE子の例**

幼稚園で集団行動ができず、他の子どもをつきとばしたり、叩いたり、噛みついたりする。先生にベタベタとくっついて甘えたがるけれど、注意されたり、要求が通らないと大声で泣きわめく。食べることばかりに関心があり、やたらと食べるので、肥満児である。こんな訴えで幼稚園の先生にすすめられて相談に訪れた。母親はE子の生育歴について次のように語った。E子が出生する直前、母親は父母を相ついで亡くし、非常に心が沈んでしまっていた。E子が生まれても喜びはなく、約一歳頃まではほとんどクリブに入れたまま、必要な食事は与えてもあとは放りっぱなしだったという。母親自身、必要なことをすませるとふとんの中に入り込んで何もする気がしなかった。E子はおとなしい赤ん坊で空腹になると指をチュウチュウと吸って、泣くこともなかった。一歳を過ぎて、自分で歩けるようになると手当り次第部屋の中をかきまぜて、いたずらが激しい子どもになって来た。そのうちに朝、まだ父母が起きないうちから一人で起きて、家の中の食物を手当り次第食べ始めた。二歳の頃は冷蔵庫を自分であけて食べちらかしているのであった。母親は当時夫との仲も良くないため、E子のことは放擲(ほうてき)するか、時折衝動的に叱っていたようである。三歳半頃から、E子は肥満児で、落ち着かず、些細なことで母親や他人を叩いたり、噛みついたりし、母親も、自分の育て方が悪かったのでは……という不安を抱き始めていた。

私はE子の遊戯治療を約二年間続け、大半の問題は消失させる

ことができたが、その二年間、治療者として大変苦労をした。治療の初期の頃、わたくしが痛切に感じたことは、彼女の自我の弱さ、と共に未分化な攻撃性であった。彼女自身、ときには、何故、また誰のことを怒っているのかもわからず、ただ満足しないで癇癪を起こして泣きわめくのである。そうすると治療室をとび出して、あてどもなく建物の中をうろつかなければ気持ちが鎮まらなかった。食べ物は瞬間的に彼女の心を落ち着け満ち足りた気持ちにさせたのであるが、それも食べ終ってしまうと、また心理的空腹感が起きるようであった。治療者の私と本当の信頼関係が育ってくるに従い、(約一年半かかったが) 彼女の 未分化な攻撃性は次第に収まり、嫌なことはただ言葉で表現し、行動に表わさなくてもすむようになった。治療者との信頼と愛情を持った関係をとおして、遅まきながら彼女は自我の基礎を作ったといえよう。

E子のように母親との基礎的愛情関係を経験せずに成長してしまった子どもたちを児童相談所などで時折面接することがある。母親が精神病でろくに世話をしなかった子ども、母親が蒸発してしまって、父親に何とか育てられた子ども、あるいは転々と親類に預けられた子ども、等々。このような子どもの共通点は、一見軽い知恵遅れのように見えること、集団適応が悪く、衝動的に乱暴をする、時には盗癖があるなどで、重度の自我の発育障害と攻撃性の未熟さ、コントロールの拙劣さが特徴的である。登園、登校拒否の問題を持つ子どもたちも大抵、攻撃性の処理のし方が下手である。友だちの間で、自己主張ができず、従って仲間に入れない。ある登校拒否を続けている中学生が 言っている。「自分の言いたいことが言える友だちがうらやましい。わたしにはそれができない。何だかそうすると友だちに嫌われそうでこわいから」彼等は同年配の仲間たちとの関係で、前に述べたような、自己の正統性を守り、主張し、競争するという攻撃性から発展した健康な自我の防御機能を営むことができず、内に籠って他人からは非常に内気な子どもという印象を持たれる。ところが彼らの攻撃性は決して弱いわけではなく、むしろなまなましく、未分化のままに存在し、家庭では暴れたり、母親に難癖をつけたりして家人を困らせている。彼等と面接をしていて気付くことは、彼等が思考の中では非常に攻撃的なものを持っているということである。嫌いな教師、友人に対し「あいつ」「やつ」という言葉で罵倒し、敵対関係でしか人間関係を考えることができない。ある小学校六年の女の子は、友人、教師、母親すべて嫌いな人を奴隷とし、女王である彼女に従わない度に鞭で百回叩くという空想を描いてい

た。攻撃性は空想の中でもさまざまな形で生き続けるのである。

最後にいわゆる知能・情緒障害児の攻撃性について触れよう。言語発達が非常に遅い、非常に多動で時には乱暴である、知能も遅れている、このような問題の幼児たちのことである。あまり多動であるために親は躾に、幼稚園は保育に困難であり、また何故これほどに落ち着かないのか、と人々は不思議がる。言うまでもなく、多動の根本的原因は脳器質的障害に基づくのであり、大抵の子どもたちは学童期後半の年齢頃には多動は収まっていることが多い。ところが中に何時までたっても落ち着かず、また人間関係も作れず、従って特殊教育からもはみ出してしまう子どもが居り、病気がそうさせているのかと思われ勝ちである。しかし長年の障害児保育、教育の経験をとおしてわたくしたちが痛感することは、決して原因をすべて脳障害にかぶせてはならないということである。その原因の大半は、長い日々、本人が接して来た母親、家族の人々の態度、障害児に対する正しい愛情・理解・受け入れがあったか否かによるものである。そこで脳、その他何らかの障害を持つ子どもたちには、障害があれば尚更一層のこと、自我の成長を促し、攻撃性の適切なコントロールの機能を育てる環境を与えることが非常に重要である。そのために、障害の早期発見、母親・家族を含めた障害児保育、教育の場が充実することが望ましいと痛感する次第である。

（中沢小児クリニック）